

Title	第6回：西原町立西原中学校と「CAT西原」の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 115-134
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25801
Rights	

第6回：西原町立西原中学校と「CAT西原」の連携について

と き：平成 23 年 12 月 3 日（土）10：00～12：00

場 所：琉球大学 文系総合研究棟 603

対象者：平良 嘉男氏（西原町立西原中学校校長）

与那嶺 絹子氏（CAT西原会長）

調査員：9名（島袋純、佐藤学、新垣光栄、大宜見洋文、大城武秀、嘉数学、饒波正博、前城充、中村任子）

オブザーバー：福里知（南風原町立翔南小学校 PTA 会長）、平良潤（宜野湾市立大謝名小学校 PTA 会長）、渡久地保雄（那覇市立久茂地小学校 PTA 会長）、東恩納寛治（那覇中学校区青少年健全育成協議会）、新垣百合恵（琉球大学教育学部学生）



▲左から平良氏、与那嶺氏



▲聴き取りの様子

（敬省略）

平 良：西原中学校の校長をしております平良と申します。宜しくお願いします。

今日は久茂地小学校の方もお見えになっていますが、今話題となっている学校の統廃合のことで大変胸の痛い思いをしています。実は4年前、私は那覇市の教育委員会で学校教育部長をしておりました。あの時は、小学校の統廃合、学校選択制、アスベスト、学校二学期制、民間への給食委託等の問題が全部重なり、議会で50くらい答弁をするなど苦労した経験をしました。その後は学校現場に戻って楽しい学校生活を子どもたちと過ごしているところです。

それから私の人となりを少し紹介させていただきたいのですが、私は52年前の宮森小学校墜落事故の生き残りです。そのために、今語り部として県内外、海外を行脚し、今年の夏は一番行きたかった米国に行って講演をしてきました。これからも基地の島沖縄の叫びを自分のライフワークとして伝えていきたいと思っています。そういった働きもしている人間ですので、宜しくお願いします。

それでは今日は、学校と地域の連携のあり方について、教師の視点から話をしたいと思います。私は10年前、那覇市立松城中学校の校長をしていました。その時からずっと学校と地域の連携、「学社融合教育」を掲げてきております。私が提唱しているのは、学校を1つの新たなユイマールづくりにしたい。学校経営は地域づくりだと考えています。現代社会の家庭・地域の形が変化していると思います。学校現場にいとそれを本当に痛感します。大家族から核家族、

少子高齢化等々あります。そういった中で、大人社会の価値観が大きく変わってきているのかなと思いますし、社会構造や特に人間関係の希薄化が今叫ばれています。

そして子は^{かすがい}鎔だだと思います。希薄化した人間関係を結ぶのが子どもだと思います。そして、子どもというのは地域の次代を担う人材なんですよね。私たちは地域人ですが、目の前にいる子どもたちに地域の未来を託さないといけない。それをお互い確認しておきたいと思います。

学校は人材の宝庫です。ここにいるみなさんも学校で育てられた人材だと私は思っています。ですから、地域づくりのキーワードは次世代の育成であって、地域社会は子どもたちを育てていかなければならないし、それぞれの地域の中で子ども会、ジュニアリーダー、青年会が育っていないと地域社会の未来はクエスションマークだなと思います。

私は去年、うるま市立宮森小学校から西原中学校へ赴任したんですが、すぐ町の青年会長に青年会の活動の様子を聞きたいということ学校に来てもらいました。そこで、青年会が低迷しているという話を聞いたものですから、「それじゃまずいんじゃないか。その地の青年会の活動状況でその地の社会を占うことができる。青年会の活動が活性化しないと。できるだけ力になるから」と言って、できるだけ青年会の行事には参加するようにしています。そして彼も、本校の学校評議員になってもらっています。若い世代を学校評議員や評価委員にどんどん入れながら、一緒に地域づくりを頑張っていこうと考えています。学校は人材の宝庫なんですよ。

私の学校経営目標は3つあります。「1. 子どもたちの生きる力を育む」「2. 学校教育を支援するコミュニティの構築」「3. 地域の歴史・文化を誇りとし、継承する人材を育成する」。特に2つ目ですが、よく言われていますようにPTAからPTCAへの転換ということで、地域を取り込むことがこれからどうしても求められていると思います。この間、私は中頭地区の校長会の会長を務めていますが、本校の保護者でもある県小中学校PTA連合会の会長に「これからはPTCAですよ。Cを入れる意味を考えて運動していきたいですね」という話をしたばかりです。「私の子どもは中学校3年生なので卒業したらPTAもこれで終わりです」と言う方がいますが、これは違うと思います。卒業はありません。永久欠番だという話をしています。

学校というのは地域の学校であって、「ワッター学校」という意識を持たないと、「あなた方の老後の地域は誰が担うの?」と。そういう声かけをいつもしています。

3番目の地域の歴史・文化も子どもたちに伝えたいと思います。私は、4つの学校の学校長を務めてきましたが、地域の方々と上手く連携していくことを心がけながら学校づくりをしてきました。今回の本校の文化祭でも、校区の小波津自治会が7年毎に大きな村祭りをするんですが、その時に見た棒術を小波津の子どもたちに継承させたいと思い、小波津に住む子供たちをピックアップし一緒に棒術保存会の指導を受けました。そして文化祭当日は校長挨拶の代わりに棒術を子供たちと共に演舞しました。その指導を受ける中で大きい兄にたち、青年たちとの関わりがあって、獅子舞も踊れるようになりました。子供たちと地域とのつながりができたと思います。

「CAT 西原」の取り組みを紹介します。これも学校教育を支援するコミュニティの構築ということで捉えています。CはCommunity、AはArt、TはTheater、地域芸術劇場とネーミングしました。地域の文化活動を一緒に鑑賞しようじゃないかということです。子どもたちの文化活動を見てほしいということと、地域には芸術家の方々がたくさんいますので、そういう人

たちのステージと一緒に鑑賞しながら共に癒しの時間を共有したいなという思いでやっています。私のイメージとしては昔の地域の再現ですね。地域と子どもたちのコミュニケーションの場をつくる。地域の人を学校にとにかく呼び込むという考えで進めています。お隣にいます CAT 西原会長の与那嶺さんが非常に協力的で、大変素晴らしい方です。後でご紹介します。

地域へのメッセージの発信も積極的に行っています。例えば、西原中学校の前を通る時は正門の前を見てください。いつも私がメッセージボードを掲げております。機会があればご覧になってください。また、サンエー西原シティ店前に前身は西原製糖工場だった新中糖産業の野外製糖博物館ができていますが、サトウキビを載せて馬車を引いている大きな壁画は、うちの子どもたちの作品です。東屋のすごく綺麗なサトウキビの製造過程のイラストも子どもたちの作品です。なぜこういうことになったかという、地域の企業を回りながら学校支援をお願いしているんですが、新中糖産業の社長さんと話している中で、屋外の博物館を作るという話があったものですから、それでは美術部の子供たちを使ってくださいと提案しました。製糖工場が西原町の戦後を支えた1つの地域産業としてのシンボルであった。そういう歴史を子どもたちに知らせるためにも、うちの子たちを使ってくれませんか。そこで博物館の軌道馬車の大壁画と東屋のテーブルのイラストを作成することになりました。非常に評判がいいです。中学生とは思えない出来栄えですので、サンエー西原シティの前を通った際にはどうぞご覧になって下さい。

それから、宮森小学校ジェット機墜落事故と沖縄戦の展示会も平和教育を推進するということで行っております。ご承知通り、沖縄戦では4人に1人が亡くなりましたが、この西原町は2名に1人が犠牲となっております。そういうことを生徒たちに伝えるために去年から続けてやっています。

学習支援ボランティアも導入しています。今、学校現場はマンパワーが足りなくて、色んな子どもたちに細かいサポートをしてあげたいんですが、なかなかできない状況。なので4名の学習支援ボランティアを活用しています。琉球大学の学生で教員を目指している学生がいたら、ぜひうちの学校に送ってもらいたいと願っています。

地域には、学校とPTAがあります。私はPTAの方々に、「PTAは学校と地域を結ぶ架け橋ですよ」と言っています。教員は1年で三分の一が異動します。2、3年で半数は異動します。大半が5年で異動します。残るのは地域と学校だけなんです。学校におんぶに抱っこという考え方は捨てた方がいいと思います。地域の子は地域で育てるという意識を持ってほしい。自分たちの学校なんだという考え方がコミュニティ・スクールなんですよ。私も大賛成なんです。まだ沖縄にはパイロット事業として入ってきてない。若い先生方にもコミュニティ・スクールの到来について「これからそういう時代だよ。意識改革をしなければ」と話しています。学校は地域の次代を担う子どもたちの学校ですから、その子どもたちにどうアプローチするかをお互いは問われていると思っています。そのためにもPTAが学校と地域の架け橋になってもらいたいと思っています。

失った「3つの間」についてよく聞かれると思うんですが、3つの“間”が最近少なくなっているんですね。失った“間”の1番目は「時間」です。家族と一緒に過ごす時間がなくなっています。テレビが主役になっています。ほとんどの家庭が共稼ぎです。ですからPTA活動も

そのような状況を反映してかなり厳しい状態があります。子どもたちも塾や習い事、部活動等、非常にスケジュールが詰まっています。

2番目は「空間」です。お互いのスキンシップ。肌を感じるような、息遣いを感じるような空間がなくなっています。子どもたちが子供部屋に閉じこもっていないでしょうか。地域では空き地や原っぱがなくなりつつあります。そのいう環境の中で、子どもたちはどうしても家でゲームをしTVを見るような状況の中で育っていますね。

3番目は「仲間」です。家族の絆の含め人間関係です。沖縄は「模合社会」ですが、以前に比べたらいかがでしょうか。私は校長室を「カタレー；語れえ」という喫茶店にしています。教育談義をするんだったら無料ですよ、いつでも来て下さいと保護者地域に呼びかけています。

次の歌と一緒に歌ってみましょうか。意味があります。とてもいい歌です。

♪母さんの歌♪

かあさんは 夜なべをして 手袋あんでくれた
こがらし吹いちゃ 冷たかろうと せっせとあんだだよ
ふるさとの便りはとどく いろりのにおいがした

内職をしたり、囲炉裏を囲んで一緒に食事をする、ラジオを聞く、そしてそのそばでお父が農作業をする。そういった土の匂い、汗の匂いというのがあったんですが、それが今はなくなってしまったなという感じがしますね。いかがでしょうか。生活の匂い、親の生きざま、豊かな自然、そしてスキンシップ等々。その様な家族や親族、友人・仲間たちと一緒に過ごすことが少なくなっていないですか。

横道にそれますが、鉄の暴風と言われた沖縄戦で、米軍の従軍医師がいたんですね。米軍は精神科の医者も共に行動していました。要するに、あのような生きるか死ぬかの中で発狂する兵士たちを手当てし、観察して必要なら本国へ送還させるという仕事をするわけです。沖縄戦でも米軍はそういった対応をしたそうです。ところが、ウチナーンチュには精神的に異常をきたす人がほとんどいなかったそうですよ。なぜだと思いますか？不思議ですよ。このドクターはしばらく沖縄に残って、この原因を調べるわけです。彼が結論付けたのは何かというと、ウチナーの子育てでした。乳幼児期の子どもの要求をすべて受け入れる。おっぱいが吸いたいと泣けば吸わせ、畑に行っても泣いたらすぐにおっぱいを与える。そういうような子ども中心の、子どもの欲求を十分に満たしてあげる、スキンシップを十分にしておけるといった子育てです。私たちが小さい頃は、仕事を持ったお母さんは隣りのおばさんに子どもを預けていました。隣りのおばさんは自分の乳房を自分の子どもと預かった隣りの子どもに与えるという光景を良く目にしました。乳幼児期に十分な愛を与えた子どもというのは、ストレスに強い子どもに育つと彼は結論付けて本国に帰りましたが、確かにそうではないかと思ったりしますね。

最近では金属バットで子が親を、親が子を殺めるというような時代ですけれども、そういった大事なものが欠けてしまっているのかなと思います。

ところで、なぜ赤ちゃんは可愛いのでしょうか？その仕草、表情、かわいい手足、やわらかくすべすべした肌。赤ちゃんの可愛さとは何でしょうか？種族の連続、お互いが人間という種族の連続のために、赤ちゃんに対してそういった感情を持つのだと思います。この写真の子どもは私の姪っ子です。4歳ぐらいかな。答えを言いましょうね。「保護色」です。なぜ赤ちゃん

って可愛いのかなとずっと考えていました。ところが、教員をしている姪っ子が「おじちゃん、保護色じゃない？」と簡単に言ったんです。その時に、はっとして、そうだ、保護色を発しているんだ！だから人間は赤ちゃんの発信する保護色に触発されて子育てをする。そうすることで人間の種が存続してきたのではないかと、彼女の言葉に納得させられました。子どもたちは地域を担う人材です。地域のパートナーとなるんですよね。学校と地域はそれを育てる役目がある。私は学校教育は地域の未来を創造するものだと思っています。

それから、学校と地域の連携について。よく PTA の方々、お母さん方や地域の方が PTA 活動やボランティアをしていただく時に、なかなか理解してくれないようなことがあります。「先生方が楽するために自分立ちを呼んでいるのか？」とよく言うんです。とんでもありません。違うんです。今ある学校力に地域力を加える。そうすることでその力は無限大になるということとを私は言いたいんです。教師が楽になるというわけではないんです。先ほども言いました、「地域を担う人材はここにいるですよ。だから皆さんは関わらないといけないんですよ」と言うんですが、なかなか伝わっていないような気がします。

子は親の鏡ですよ。生徒は何の鏡でしょうか。地域の子どもは何の鏡でしょうか。答は、生徒は教師の鏡です。私はいつも言っています。達成度テスト、全国学力テストが低い？これは家庭のせいではない、地域のせいではない、ましてや子どものせいでもない。私たち教師のせいだと。自分たちの教える力がないから低いんだと自戒するようにと話しています。そして、青少年の喫煙や飲酒、暴力、殺人事件、万引き等をやる地域の子どもたちは、地域の鏡です。地域の責任ではないですかと。

ですから、大人のネットワークを構築して子どもたちを育むことが今求められていると思います。一地域だけじゃ駄目なんです。子どもたちのネットワークはすごいですよ。一地域じゃないです。今や中学生になると、携帯を武器に佐敷、糸満、名護、中部など広い範囲でつながっています。これまでは一学校で群れを成していた子どもたちも、今や色んな地域の子どもたちと群れをなしネットワークを築いて動いています。人脈を構築することでは大人より先んじています。大人が後手に回っているのが現状です。ですから、大人も子供たちに負けずに大人のネットワークを構築しないといけないと思います。

地域づくりは学校づくりです。冒頭に私は、学校は地域づくりと話しましたが逆でもあるんですね。これは、一地域人として、そういうふうに見てほしいですよ。今日は PTA の方々もいらっしゃると思いますが、地域づくりのためには学校づくりをしないといけないと思います。

沖縄はユイマール社会と言われますが、どうでしょうか？私はユイマールは崩壊していると言っています。具体的に一例を挙げますと、県全体の自治会の加入率、何パーセントだと思いますか？20%台なんですね。ヤマトは何パーセントだと思いますか？70%くらいです。それから、地域の防災組織ですね。ヤマトに行くと、自分たちで作った消防団や自警団があります。ヤマトは組織率 70%台ですね。沖縄は6%です。そういった数字を見ても、沖縄のユイマールについて考え直す必要があると思っています。

CAT 西原に関しては校長喫茶を来訪する方々に、芸術と一緒に鑑賞して、子どもたちとお茶やケーキを食べながら癒しの空間を共有し、そこから明日のエネルギーをもらうというようなことをやりたいねと話をしていました。そのことに賛同した与那嶺さんが協力してくれました。

与那嶺さんは2年前までは西原中央公民館の館長でした。人脈がすごいです。与那嶺さんがコーディネートしてくれたボランティアの数は100名に上ります。会社全員をボランティアに巻き込むことができる人です。地域を動かす力を持っています。

春はコンサートをしました。夏はライブコンサートしました。30万円くらいかかるステージを保護者が無料でやってくれました。照明とか音響とかですね。200名くらいの方々を集めました。今度はクリスマスコンサートを企画しています。多嘉良和枝さんという三線片手で世界を放浪した方がいらしてくれます。芸術家や地域の方々、うちの子どもたちを交えての一つの舞台を演出をしたいなと考えているところです。

以上、大雑把な説明になりましたが、西原中学校が取り組んでいることについて、紹介させていただきました。ありがとうございました。

島 袋：続いて、地域のほうからの学校支援をお聞きしたいと思います。与那嶺さん宜しくお願いします。

与那嶺：与那嶺絹子と申します。宜しくお願いします。今年の3月までは地域コーディネーターとして活動して、またCAT西原も平良校長先生たちと立ち上げました。今はCAT西原の会長をしています。

沖縄県は平成19年度からあちこちでやっておりますが、西原町も平成22年の9月から学校支援地域本部事業がスタートしました。その時私は公民館に関わっていましたが、地域の色んなボランティアをさせてもらっているものですから、人脈の面で難しいので、急遽応援を頼まれました。とにかくボランティアを募らないと事業ができないということで、あちこちかけめぐって、学校からの要請をボランティアに頼むなど、無償でやっていたという感じです。学習支援ボランティアのみなさんは教師が何名とか。色んな特技を持っている方や、喜んで参加してくださる方をお願いして登録してもらっていますね。

県では平成19年くらいから沖縄市や那覇市の石嶺中学校が学校指定されたようです。全県一斉に下ろすのではなくて、西原町は5番目になります。

去年、私がいた時にも、石嶺中学校の校長先生が発表されていてすごい印象に残っています。コーディネーターさんがいて、色んな人を巻き込んで、学校で地域の行事ですか、棒術などの文化を通して盛り上げているという話を聞いてきました。このように県内各地、国の予算をもらってやっているようです。

島 袋：西原町は平成22年の9月からスタートし、与那嶺さんはコーディネーターとして関わったんですね。それ以前は、コーディネーターはいらっしゃったんですか？

与那嶺：昨年9月にスタートした時は、学校のPTA事務をなさっている方をコーディネーターとして雇っていました。ボランティアを要請して、それに対して事業を発すると予算が下りてくるわけですが、彼女は地域と関わりが少なかったものですから、報告ができない状態になったようです。それで慌てて教育委員会から応援を頼まれて、二人制で、私は途中から関わりました。

島 袋：では1年くらいですか？

与那嶺：6ヶ月で任期は終わりましたので、私が関わったのは3ヶ月くらいです。そして今年の4月からは町が主体になって、県と一緒になっています。

島 袋：どの授業でどんな人材が必要で、地域の方々とどうやって協力関係を結んで、授業を作っていくかというのは、学校の側から学校支援ボランティアにお願いがあって、それから引き受けていくという形ですか？これは、校長先生にもお話お伺いしたいんですが、どうやって学校側の教育的なニーズをコーディネーターの方々にお伝えしていますか？

平 良：学校長には地域連携担当の教員がいます。当初は教頭が担当していましたが、現在は教員が行っています。その教員が学校側のニーズというものをまとめて、コーディネーターと調整しながら人材を確保していきます。手順として与那嶺さんたちがボランティア募集のチラシを作り自治会の広報に折込をするとか、町の広報で宣伝するとか、そういった方法で行っています。

学校長としても経営方針として学校を支援するコミュニティの構築を掲げています。学習支援ボランティアや環境整備のグリーンボランティア、部活動の外部コーチ、読み聞かせボランティアなども一つの地域の方々の支援ですので、学校支援事業の一環として取り組んでいるところです。

島 袋：それでは、学校の側にも担当の先生が一人いて、その先生が必ず学校の先生方のニーズを聞いて、そしてコーディネーターの方と連携して授業に支援していただく、という理解でいいですか？

平 良：はい。

島 袋：与那嶺さんは年度の途中か応援に入った、ということでした。一般的に、年度前の2月、3月に打ち合わせがあって、4月から学校に入るというのが入りやすいと思うんですけど、学校の年間スケジュールが進行している最中に、急に支援に入ってくれと言われても、学校の現場にいらっしゃらない方だと戸惑いや、色んな疑問が生じてくるんじゃないかと思います。その打ち合わせはどんなふうになりましたか？

与那嶺：支援ボランティアは9月に発足して辞令をもらってスタートしていますから、色んな説明を聞いてスタートしているわけです。ですから、ボランティアの中には退職教師も何名かいますので、先生たちから学習支援や環境整備など要請があればできます。

私が取り組みで一緒にやったことは、校舎で壊れたところの修理の要請があったので、大工さんを手配して全くのボランティアで直してもらいました。また、環境整備ボランティアの方が去年の暮れから現在まで毎週1回、花壇の手入れしてくれています。学校の花園を綺麗にしていますので、それを見た子どもたちも触発されて、今、西原中学校は花がいっぱいです。先生方も喜んでくれます。

島 袋：公民館長として地域にどういう人がいるというのを熟知されていて、自分なりのそういった情報の資源を持っていた。学校側から要請があればこういう方がいるとイメージしやすかったので、簡単にコーディネートもしやすかったんですか？

与那嶺：そうですね。私もずっと前から西原高校のPTA会長とか婦人会長とか、現在は保護司もやっていて、色んな情報が、満杯ではないですが、地域の情報でしたら西原町に住んで30年になりますので、他の人よりもそういう情報が掴みやすかったということです。

島 袋：出身はどちらですか？

与那嶺：私は八重山出身です。結婚してここで暮らしているのが一番長いことになります。ですから、もう西原の人みたいな感じです。子育ても西原です。

島 袋：お仕事は公民館ですか？

与那嶺：子育てをしながらボランティア活動を一館長として、2期4年務めました。

島 袋：もしかしたら、もともと西原町出身で西原で育った人よりも、外部から来て地域に関わりたかった時に、学校に関わることで、PTA 活動に関わるのが非常に重要だし、それで地域の人になっていける。そして、さらに、西原町の全ての地域づくりに積極的に関わられるほど、西原の人になっていけるのではないのでしょうか。

与那嶺：一時期は仕事もしていましたので、関われない部分もありましたが、地域に住んだら、地域のことを知らないといけないということで、婦人会活動をしながら町に行ったりしましたし、一番末っ子の学年委員長も経験し、責任者の一人となり、キャンプなどの子どもたちとの思いで作りに同行したこともあります。

島 袋：調査項目から集中的に5点ほどお聞きします。去年から活動的になったということですが、今の時点でこういう人が地域にいる、というのがだいたい分かってきて、さらに今年の4月からは、もっとこんなことができるんじゃないかな、と可能性を広げて、パワーアップした活動が推測できるんですが、前年度の試行的な段階から更に発展したことってありますか？

平 良：それは、CAT 西原ですね。

また、グリーンボランティアはもう定着していますが、今その方々と考えている構想なんですけど、学校で苗作りをします。それを、学校の前の県道 38 号線沿いの商店で組織する 38 通り会と連携して沿道に子どもたちが育てた花をプランターに植えて置こう。そのプランターには子どもたちの一言メッセージを入れます。それを通り会の店頭において育てる。そうすることによって、通りが華やかになりますし、それが町全体に行きわたると、花一杯の町になります。

散水は登下校の時間にしてもらいます。朝、「おはよう」と声をかける。夕方、「おかえり」と声をかける。そういった挨拶が絶えないまちづくりをしたいと考えています。学校ではまず 38 通り会をターゲットにしているわけですが、これが各学校単位で広がっていけば西原町は花一杯になると思います。子どもたちのメッセージが入ることによって、管理する商店街の方々にも責任が伴うわけですよ。そして、水かけをすることによって、子どもたちとのコミュニケーションや接点が増えてくるわけです。そういった子どもたちと地域との関わりも、花作りでもできるわけですね。CAT 西原が立ち上がりきました。今度は、花作りで地域とのつながりを広げてみたいです。

それから、私も行政に長いこと勤めていましたが、この地域支援本部事業をチャンスだと思っています。ことを成すためには人・モノ・カネですから。金がないではなく、あるんですよ。どんどんやっちゃえと。地域の人たちと話しているのは、お金があるからやるんじゃないですよ。なくてもやるのがお互いです。子どもたちの支援をするということは自分たちの町づくりをすることになるわけですから、お金がなくてもやるということを確認し合っています。とにかく行政がお金出すなら、お互いが使うのは当然と考えています。どんな形であってもやろうと。それを町づくりに活かせばいいんですよ。子どもたちのために使っていくんです。要するに、町づくりと、子どもたちを育てることとは密接な関係になります。そういう考え方で、

学校からもどんどんアプローチしています。それに対して、与那嶺さんたちのように地域からアプローチがあって、無限大に広がっていくということになるのかな。

島 袋：学校支援地域本部事業は市町村で全部やり方がバラバラで、市町村単位で1つだけ作って、コーディネーターをそこに統括しているところもあるし、学校単位で作っているところもあります。それから、3校か4校くらいを担当する2人のコーディネーターというところもあるんですよ。本当にバラバラですが、一番僕らが望ましいなと思っているのは、学校に1つ作って学校に1人係りの人をつけること。それが、コミュニティ・スクールと直結してやりやすいと思ったんですが、西原町のやり方としてはどんな形なんですか？

平 良：残念ながら、西原町がこの事業を町内全校で実施するという状況ではありません。本来のまちづくりという視点からは非常にいいものなんですよね。三分の一は国や県からもらえるんですから、まだまだそこまでは行っていないと私は思います。

与那嶺：西原中学校区では小学校区は2個。今年度は南小学校が指定を受けています。西原中学校区では3個あります。

大宜見：平良先生は赴任されて何年目ですか？

平 良：2年目です。支援事業は1年目の年度途中から来ました。

島 袋：西原中学校は小学校は関係なく、西原中学校のための学校支援地域本部で、西原中学校のためのコーディネーターが1人ついているわけですね？

与那嶺：はい。4月からは、南小学校が指定を受けています。坂田小学校は去年からありますので。

大宜見：では、平良校長がこの制度をすでに知っていて、手を挙げたという形ですか？

平 良：地域のことで、お金がもらえるものはやろうと。（笑）

西原中学校、坂田小学校、西原南小学校の3名のコーディネーターがたまたまCAT西原に回っていたので、一緒にやろうじゃないかと声をかけました。

また、西原中学校区だけではなく、西原東中学校区も含めて考えていきたいと思っています。町内の小中学校は丁度いい規模ですから、町内小中学校全体で取り組んでほしいと思っています。要するに、町づくり、地域づくりというのは、全体をつなげていかないと意味がないと思っていますので、西原の子どもたちは西原町皆で育てよう。西原中学校の生徒も西原東中学校の生徒も同じ西原町の子供だという思いで接しています。

中学校では生徒指導連絡協議会というのがあります。これは、各中学校区単位でやっているんですが、東中校区も西中校区も一緒にやろうということで、西中と東中校区全体の連絡協議会を去年から年に3回は開催してます。そういう大人のネットワークをどんどん築いていきたい。この学校支援事業も、坂田小と南小を含めた西原中学校区合同でやったらどうか。3校3名のコーディネーターが集まった時にはお互いの人材リストを共有しようじゃないか。みんなでやろうと。そうするとお互い楽になりますから、競合するのではなくて、共有していこうと。これからだとは思いますが、とにかく島袋先生がおっしゃったように、組織化していく必要があると思います。これが有機的につながっていけばいい。せっきくの地域の資源を有効的に活かさなければと思います。それでもそれぞれの学校長の経営方針もありますから、その辺は難しいところですね。

島 袋：調査項目の4番目なのですが、学校の教員の側に地域の方々と連携の手間隙はどうなっていますか？教員養成のプログラムの中に、地域の方々と授業を作るということは、ほぼありません。教育実習でさえもそういう形になっていたわけです。最近はずいぶん変わってきていますが、それでも学校の教員側にそういった地域の方々と結び合う能力はありません。そういうことを想定して育てられていないからです。職場というのはOJTするところでもないし、地域の方々とプロジェクトするということもないし、こういった研究会なんかにも一番来ないのは教員なんです。（笑）地域の方々と一緒になって何かやってみれば授業を支えてもらえるし、助かるというのも分かるんだけど、まず接触して一緒に何かをしようということに関して、非常に消極的な姿勢があると思います。これをどう心を開いて、地域と連携することで良いことあるということを伝え、実際にやっていったのでしょうか？

それからコーディネーターの方たちは、学校の先生方が嫌がってあまり関わろうとしない、地域の方々も開いていって地域に出してこないといけないじゃないですか。この辺で苦労したことはありますか？

平 良：私もヤマトで8年余りフリーターをしていたので、少し社会をかじってきていますので、少し広い視野で学校現場を見ることができていると思いますが、学校長としての課題はいかに先生方の意識を変えていくか。大分苦労しているところです。ただ現場にいと、週5日制になってから非常にタイトなスケジュールになっています。一例をあげますと、私の音楽教諭時代は一つの音楽科に3名の教諭がいて仕事を分担していたわけですが、今は1人で全部やっています。必死なんですよ。だから、精神的に病むとか病気になる先生がどんどん出てきています。

島袋先生の指摘は当たっていますが、ただ今学校現場にそういった余裕がないんです。もっと子どもたちと接していきたいが、なかなかそういった時間がとれない状況です。小学校を4カ年間2校、校長を経験していますが、小学校は最悪ですね。朝8時前に来て18時頃まで休憩時間がないです。ですから、それは理想なんです、今は学校現場にそういう余裕がない。今中頭地区中学校校長会の会長をしていますが、国に対しては毎年教員の数を増やせ、と言っています。そうしないととてもじゃないけど、子どもたちに対する細やかな指導ができません。いかんせん日本は教育行政に関しては後進国ですから、一学級生徒40名を見ろというような状況の中で、そういった余裕が現実としてあまりないですね。ですが、その中でも変えていかないといけませんから、「とにかく、これからはコミュニティ・スクールに移行する時代だよ！」と口ずっぱく言っています。

管理職として、職員が1年で三分の一が異動する。5年で大半が異動することを考えた時に、地域の方をどんどん取り入れることが地域と学校との敷居を低くすることになる。また、「ボランティアが来ることによって、地域の方が学校を知ることになり、その方々が自分たちのサポーターに変わるんだよ」と言っています。地域の方々が学校の現状を見ることで、必ず変わります。どんなに苦労しているか分かるわけですから、必ずサポーターになります。

クレーマーをなくすことは簡単です。僕のクレーマー対策は地域づくりです。地域のおじい・おばあとも仲良くなったら、絶対誰もクレームを言いません。地域のおじい・おばあに怒られるからです。「またこいつ、ワッター校長先生に何言うか！」と。そういうことになれば絶対クレームは来ません。

ボランティアもどんどん入れることによって、地域の方が先生方はこんなに苦労しているんだということを分かってもらえるんです。そういうことをしながら地域の方々と教育活動に取り組ませることで教師の意識を改革しようとしています。現状は厳しい。

コミュニティ・スクールのことも、その前段として現在、学校長の諮問機関として設置されている地域人材から成る学校評議委員会があります。そのような委員会を通して地域の方々の意識も啓発しなければならないと思います。評議員としてどういう視点で校長へ提言をするのかという面ではまだまだ勉強しなければいけない状況があります。ましてや学校を評価する評価委員会も設置されていますが、その委員になると、「え、校長先生、学校の何を評価すればいいの?」と、これが現実です。そういう意味ではまだまだ。沖縄ではコミュニティ・スクールというのは厳しいかなと思います。

島 袋：繁多川では、とにかく先生方を非難しないと言っていました。支援するボランティア側が自分たちはクレーマーではなく、サポーターなんだということで意識を作りをしているようです。最初はやっぱりボランティアの方も先生方も慣れなくて喧嘩するような場面もあったようなんですが、そういったご苦労はなかったですか？

与那嶺：私は西原町の食生活改善委員という立場でもあります。子どもたちへ食生活のお話や、調理実習にボランティアをやっていただきたいということで、西原南小学校の四、五年生を対象に入っています。子どもたちとワイワイしながら料理の実習を手伝っています。

その活動の中では、先生方とそりが合わなくなったりなど、そういうのはないですね。教室に入って、先生の言う通りに、子どもたちができないところをサポートしています。料理の場合は、やはりみんな主婦ですからね、分かっているけどきちんと献立通り、先生の指示通りにやっていますね。「お母さんたちが分かるさ〜」ではなく、先生が「お米を研いでください」と言ったら、研ぎ始めるとかね。

島 袋：あと、日本の学校教育というのは、国家的な統制が強くて学習内容も全部統制があって、学習指導要領というのも重しになっていて、とにかくこれを消化したい、と。だから一斉に座学で授業して、これ以外のことはやりたくない、と。これが義務で、これをやるのさえも精一杯で、地域の歴史や文化などを学ぼうとしても、文科省から指定されているものでいっぱい、そんなのやっている暇がない。平和教育もそうで、学習指導要領にあるのか、というふうになるくらいです。沖縄の場合は、特に地域の言語もそうです。このことにどれだけ時間を割けるのかと言ったら、割けません。勉強しろと言われても、したくないというのは強いんじゃないかと思うんですが、この件に関してはどう思いますか？

平 良：例えば、町の教育委員会の教育方針がありますから、どうしてもそれを念頭に置かなければならないという経営者としての思いがあります。その中でいかにして独自のカラーを出すか。学校の自主自立が求められていますが、その中で校長サイドでできることは、自分なりの色を出すためのアイディアを出すこと、クリエイティブなことが求められているのかなと思います。例えば、地域の伝統文化を教材化したり、学校行事では文化祭や体育祭で地域の伝統芸能等を入れるとか、色んなことが出てきます。また、町の教育委員会が1つの自治体の教育行政のトップですので、独自の教育行政に取り組むという意識を持って取り組まないと厳しい。例えば、全国の学力調査にしても、独自の学力向上対策を行っていた犬山市の教育委員会は反対しまし

たよね。あのくらいの取り組みをしてないと学校長レベルでは非常に難しい。西原町教育委員会で自前の学対や地域の伝統文化等を取り入れたカリキュラムを作り、学力は大丈夫だと言えるものを作ってしまう。トップがそういう姿勢を持って教育行政を行うことが大事だと思います。

島 袋：これは教育委員会が決断して。

平 良：はい、できますよ。僕だったら、そうしますね。各学校単位で地域に根差した独自のカリキュラムを作れと。そのカリキュラムの中で小学校では何をする、中学校では何をするという具体的な内容を取り入れる指導をしていく。最終的には学校長が教育課程の責任者ですから、学校長の判断になるかとは思いますが、ある程度の独自性は出せる。

ただ、自治体のトップがそういう意識を持つということは、国と対決することになる。文科省がGOサインを出したものに、本当にNOと言えるか。地方分権の時代ですので本当は、対等の位置づけではあるんですがまだ意識改革されていない。これは県のレベルでもそうなんです。県の教育委員会が市町村の教育委員会を上から目線で見るようなことがまだあるんです。遅れているんです。県のトップも意識が希薄ではないか。

私は、月に1回か2回は昼の休憩時間、校長室で60代から70代の方々の合唱同好会の指導をしています。また、朝の全体朝会で地域の自治会長や民生委員、読み聞かせボランティアの皆さんを生徒に紹介し、合唱で相互にエールを交換するとか。自治会長さんの定例会に出て学校長便りやPTA新聞を配布し学校の情報を提供したり、校長、教頭に参加して欲しい行事があったら声かけをして欲しいと呼びかけています。そういった学校側からのアプローチは、この2年間やってきています。

島 袋：京都市の御所南小学校の校長先生をお呼びしてお話を伺ったんですが、そこで一番重要だったのは、京都では自治会ごとに1つ学校を持っていたんですよ。それが統廃合されていって、今の御所南小学校になった。京都というのは自治会が学校を支えていて、そういう伝統文化があって、学校が統廃合されると、それに対応する自治会も新しい仕組みがつけられるらしいんですよ。学校も自治会の連合組織が作られて、結局そこが「御所南コミュニティ」、要するに地域運営学校の地域本部になっているようなんですね。

そういったように地域づくりに学校が本気で関わって地域づくりをするということであれば、自治会同士がバラバラにあったり、自治会の各種団体がバラバラにあるところをさらに統合して自治会連合会を作り、さらにその中に婦人会、老人会が入っていくような組織作りをしていると。御所南の場合は、そこまで関わって学校がやったと。そこは伝統があるので地域の方々とやらないといけない。そうしないと学校が支えられないというのがあったらしいんですけど、今お話を聞くと、そこまではいっていないということですが、将来的に、そこまではないかと、今後の地域が学校を支え、学校が地域を支えるという形は上手くいかないという、校長先生のお話だったと思うんですけど。

平 良：先ほどの自治会加入率の問題とリンクすると思うんですが、地域のつながりというのは、沖縄はだいぶ希薄であると思います。京都の場合だったら自分たちの学校だという意識があるんでしょう。この辺が大きな違いですよ。それがあるなしでは、大きく違います。それに、それぞれの自治体によって違うと思いますが、西原町は自治会がたくさんあるんですよ。そうする

と地域のものを取り入れるにしてもバランスをとって取り入れて納得させないといけない。地域の人間関係というのが、コミュニティ・スクールを作るときの大きな壁になりかねない。「屋小作え」（排他的な集団意識）が大きな課題です。だから子ども中心が重要なんです。子ども中心にやれば、皆が納得するんです。地域づくりは学校作りなんですよ。

島 袋：地域づくりは子どもがいないとできないということですね。

平 良：子どもは保護色を発しています。だから納得するんですよ。自治会に入っていない人でも来るんですよ。

与那嶺：ボランティアでも学校に関するボランティアだと言ったら、みんな入ってくるんですよ。

島 袋：特に、新しく来た人たちは、「寄流民」扱いされますよね。そういう方々が、地域の人になるためには、こういった子どもの縁を通した地域への参加が一番有効な方法ということですね。

与那嶺：本当に、まだ寄流民とよく使われます。私たちが目立つとやきもちを妬く人もいますから、割り切って自分のできる範囲内でやっています。子どもたちのためと思うから、みんなボランティアもしてくれる。個人的に私が何かやろうと言っても入らないですよ。（笑）

平 良：今月の私のメッセージボードは「ヌーンヒダティヌアガ イチャリバチョーデー」（人は何人も差別はない。人は出会えば皆兄弟）です。それがないとコミュニティ・スクールは難しいと思いますよ。統廃合の問題もそうですよね。必ず地域が絡んできます。

島 袋：ということは、隔てをどうにかなくすと、どんな地域でも地域と学校との連携は作れると。

平 良：あとは人だと思います。どんな組織であっても人だと思いますね。

島 袋：他にどなたか質問ありますか？

大宜見：評議員は何名ですか？

平 良：3～5名です。

大宜見：集まりは昼間ですか？平日ですか？

平 良：年に3回あります。一緒に給食を食べたりとか、評議員の方々に合わせてやっています。

繁多川の話が出ていましたが、かなり時間がかかったんですよね。NPOを活用するなど外部委託をしながらやってきたという経緯もあるし、繁多川という地域だからできたということもあるんですよ。学校を囲む地域性、自治体の様々な要因があって上手くいく、いかないがあると思います。

学校ボランティアへの参加もなかなか厳しいです。みんな共稼ぎだし、子どもたちが学校に来れる時間に学校に自由に来れる人がいるかということかなり厳しいです。ですから一緒に授業を作ろうということもとても厳しいです。それでこれを土日にしていこうという取り組みもあるかと思うんですが、今の大人社会も日々忙しい現状にあるかと思っています。なので、学習支援ボランティアも地域の方ではなく、学生を狙っています。学生で教員を目指している人たちはインターンシップになるわけですから、一緒に授業を作って行けるんですよ。

今の沖縄社会では経済的に所得も低く母子・父子家庭も多い。都市化で孤立したそのような家庭の親もかなり病んでいるし、だから子どもも病んでしまう。子は大人全ての鏡ですよ。沖縄の子どもの現状というのは、親と地域の大人が病んでいるからだと思います。

ですので、沖縄自治研究会のような勉強会が1つでも増えていくことによって、学校づくり地域づくりが進んでいくのかなとも思います。

島 袋：一昨年は自治会の調査、昨年は「新しい公」、NPO について調査を行いました。その中で、自治会の制度システム財源について話すと、沖縄では財源がタブーな自治会も多いんですよ。排除する力も強くて新しい方が入れない。新しい住民はどこに行くかという、NPO などに頼ってそこからサービスを受け取る人も、また主体的に NPO に関わる人もいるわけです。それでも NPO が自治体、行政と完全に上手くいってわけではない。だから、組織化されない。どこにも支援されない人たちがたくさんいるというのが分かったんですね。

それから次に沖縄で問題なのは、地域と教育の関係で、今年度はそれらの関係を調べようということになりました。もしかしたら、前に調べた自治会の問題や、新しい公共といわれている市民活動団体、これもすべて統合して学校と地域を再生する中で作り直すことができるのではないかという問題意識の元に、今回このテーマなんです。

しかしながら、予算がないのでこの研究は今年度で一旦終わりなんです。

大宜見：私は南風原町の団地に住んで自治会長も3年やらせて頂いたんですが、自治会行事への参加・協力してくれる住民がなかなか増えない現状で、もうこれ以上負担になりそうな行事を増やさないでほしいと言う意識も伺えました。先生方が新たに企画・提案される事業に対して拒否反応を示すことが多いように思い、この辺がなかなか難しいなと感じました。

一方で、僕らが御所南小学校の取り組みで驚いたのは、校長先生がこれでは駄目だということで、学校側から地域行事に関わっていくようなアプローチをしていました。これがヒントになるんじゃないかなと思います。僕らの学校でもできれば、学校だけで主体にやるんじゃなくて、地域と連携してやるような行事に変えていかないといけないんじゃないかなと思います。

平 良：今自治会が低迷しています。自治会長が声をかけても来ないんです。ですから、地域づくりなんです。そして、地域づくりとは何かというと、学校づくりなんですよ。

東恩納：いつも疑問に思っていることがあります。僕らの校区には6つくらい自治会があるんですが、先ほどの屋小作え^{いせ}があって、自治会が夏祭りも敬老会も全てやるんですが、先生方を呼ぶんですが、それで行かなかった場合には、文句を言う。そういうことがあって、僕が提案したのは、あなた方で1年に1回授業しなさいと。行事を輪番制でやったら学校も来やすいし、PTA のみなさんも連携しやすいんじゃないのかと。しかし、なかなかそこはお金の問題や加入率の問題があって難しいんですよね。

新垣光：私たちの地域づくりの弊害に部活動があって、地域行事をやっても子どもたちが来ません。子どもたちが抜けることによって、子ども会の行事が成り立たなくなるのですが、これをなんとか復活させようということをやっています。

県はこの問題を分かっているが、行政は土曜日に行事を設定しています。今、子どもたちが家族と関わる時間が少ないので、我々は第3日曜日に地域の日を変更して、子どもたちを学校から地域に返してもらおうとしています。その代わりに、地域で色んなことを一緒にやる責任があります。村の行事をできるだけ第3日曜日に集中させて地域へ帰そうと。中城村だけでは駄目なので、西原町、北中城村を含めた中城ブロックでは、絶対に野球はさせないでこうとやっています。私は、第3日曜日に野球をさせないために、中城ブロックの会長になって内部に入っています。（笑）

与那嶺：私の住んでいる地域には興南高校で活躍した国吉兄弟がいるもんですから、優勝後に部落で野球の子どもたちが集まりました。

しかし、この子どもたちのニーズを掴むというのは難しいと思っています。どの団体も人を集めるのに一番何がいいのか頭を抱えています。毎週第3日曜日はカレーの日を作ってやっているはずですけど、多分集まってないですね。夏休みに一度パン作り行ったら、大人だけで一生懸命やっていました。（笑）子どもたちはなかなか集まらないですね。

佐 藤：小学校から高校まで一生懸命部活をしてきて、究極的には燃え尽きて、もうやりたくないという大学生たちをたくさん見えています。

私の地方自治のゼミで、自治会の加入率が低くなっているのを調べたいと、他人事みたいにする学生もいます。自分たちは入っているのかということと入っていない。自分たちのところからまず調べさせて、青年会があるかないか、どんな活動をしているのか、というのをやっていく中で、毎回報告してくるんですけど。なぜ自治会をやらないかということ、自分の地域では入ってなくて、隣の地域に行っているとか、自分のところは潰されたという話もあります。

それから、全般的に青年会のイメージがとにかく悪いです。大学に来るような子たちとは階層が分かれちゃっている感じがある。それでは地域がつながるというのができない。本当はエイサーがやりたいのに青年会でできないから、大学のエイサーサークルにのめり込む。これも調査した子がいて、なぜ大学でエイサーサークルやっているかということ、地元でやれなかったからと。とっても熱心にやっている子たちがいて、いいなと思うんだけど、実は、地元でやりたかったのにやれないので大学でやっていると。青年会によって地域のまとまりが強くなり、先輩後輩のつながりが強いという良さもあるんだろうけど、そこから排除されてしまう若者もいっぱいいます。地域の中でつながりの良さと裏の面もあると思います。

それから、そもそも今の若い人たちには、寄留民という言葉が通じません。それは、もともとの地域のつながりが弱くなったということでもあると思います。地域のつながりをどう作るかというのは難しい問題だと思います。

与那嶺：エイサーを通して、社会からはみ出そうとしている若者を育てようという意味も少しあると思います。仕事も何もしてないと余計に悪さをしますが、それをみんなで何とかして、エイサーでもさせたら夢中になっていく。そうじゃないところも多いかもしれませんが。だから大学生とかが入りにくい部分もあると思います。

佐 藤：宜野座から通っている学生がいるけど、宜野座の青年会はその手のヤンチャを一切させないそうです。「自分たちは伝統文化をやっています」と言っていました。

与那嶺：中に入ったらこういう規律があるわけですね。お酒も飲んではいけないと。そういうふういきちとして更正へと向かい、一緒に守っていこうというものもあってエイサーが盛んではありますね。大人が優しい目でみてあげないといけませんね。

平 良：地域がキーワードになってきますね。部活の話も子どもたちにとって部活動は魅力があるんですよ。だから、部活動と同じように子供たちを引き付ける地域の魅力は何かということを考えていかないといけない。

前 城：今日も校長先生と与那嶺さんのお話を聞いて思ったのが、過去にもこの研究会でお聞きした方々と共通していることがあるなというのが分かりました。

南風原の話をしてますが、今日来ている大宜見さんは南星中学校の会長で南風原町P連の会長でもあります。南風原も2つ中学校があつて南星中学校区と南風原中学校区に分かれます。

南星中学校区の話をするんですが、その前に我々がPTAに関わったきっかけは何かというと、私も役場にいるんですが青年会や体協に関わって、社教主事として老人会とか婦人会とかみんな関わってきました。PTAも関わってきています。それである程度、地域も人脈も分かつてきている頃に南風原町の担当として、総合計画を作ったんです。大宜見さんはその時の教育部会の会長をやってもらったんですね。

総合計画を作る中で分かったことがあったんです。南風原の自治会の加入率は70%なんです。この70%を維持するのは大変だろうなと思いました。それで今後10年間70%を維持しようという話になりました。それでどうするかというのが相当議論になったときに、ピンと来たのがPTA、学校だと。なぜかと言うと子どもを介して親がつながっているからです。そして絶えることがない。必ず新しい人が来るので、そこに10年間力を入れたら、間違いなく20年後の自治会を担う大人が育ってくる。地域に点在している人たちをどうつなぐかというのがPTAで可能だろうと考えたのです。既存の社会教育団体、いわゆるPTAなどに地域再生のミッションを与えその活動に期待するという趣旨の内容を、トップが意思表示したら10年間で地域は変わるはず。しかし我々はトップじゃないですから、地域住民として地道にPTA活動から入ろうと決めました。5年前に入った時に考えていたことは、息子が卒業してから本格的なPTA活動が始まるんだろうなということでした。先生が言われたPTCAの「C」の部分当初から視野に入れていました。その活動は「賛助会員制度」と言い、平成24年度から翔南小で本格的に稼働する予定です。

もう一つ、学校と関わるには、ちっちゃな成功体験を積み重ねて、先生方との信頼関係を築くことが一番大事だということです。最初から先生方に色々言って入っていったら嫌われる、嫌われたら地域との連携なんてできません。私は先生方との信頼関係を構築するには3年かかると思いました。しかし、最初は「前城さん、何しにきたの」という雰囲気だったのが、2年目くらいから少しずつ打ち解けて、3年目には信頼関係が気づけた感じがしました。

先日、翔南小創立20周年事業として、地域の方も含めて楽しくお祭りしたんですね。その時に自治会長さんをお呼びしたんですけど、自治会長さんは7名中3名でしたかね。その前は自治会長集めて飲みながら意見交換の場を作ったのですが、そのときは1人でしたね。ですから自治会との連携意識はまだまだです。だからあと5年は地域に出向いて活動が展開できればと考えています。

南風原に小さな部落があるんですよ。そこで今まで役場職員をしていた方が退職して地域に戻ったんですよ。この人がすごくキーマンなんですよ。人脈もある。この部落で、たまたま非行に走りかけた子どもたちがいたんですね。その子どもたちに伝統芸能を教えたのです。子どもたちが三線引いて、獅子舞するんですよ。非行に走ろうとしている子どもたちに居場所を作ってあげたもんだから、色んな所から出演依頼が来ました。そしたら褒められるじゃないですか。それで子どもたちも自信がついた。このような事例もあるんですよ。だから、地域の力ってすごいと思うので、我々も焦らず、気負わず、侮らずに地道にやっていけば、地域はつながって行って、将来的には自治会も活性化していくだろうなと思っています。

今回色んなところを調べましたが、欠けているのがネットワークですね。御所南小学校はやっぱりすごいところなんです。あそこは3年前に調べて、今年校長先生に来てもらって講話をしてもらいました。来年2月にも、再度呼び出して、沖縄自治研究会と町のPTA連合会主催で成果報告会をしようと思います。県内のみなさんも一堂に会して意見交換する場が必要じゃないかなと思います。我々も実戦部隊として永遠に続いていけたらいいなと思っています。

平 良：PTCAを組織してください。PTAではなくてPTCAにするんですよ。PTAの組織の中に地域部を設けるんです。そうすると、毎回、総会に来ないといけません。小学校にも来るし、中学校にも行かなきゃならない。だから、PTCAという組織を作っしまえばいいわけです。これが1つの地域づくりだと思います。

みんな自分の子どもが卒業したらもう卒業と言います。とんでもないです。永久欠番ですよ。そういう意識の高いところから提案をしていけば全然違ってくると思いますよ。無限大に変わっていくと思います。

ある意味では、行政側の社会教育を担う担当課の大きな仕事でもありますよね。

島 袋：特に今は分権の時代だから地域に改革をと言っているけど、一番改革が遅いのは、教育委員会です。あるいは、住民との地域づくり。大学も全然協働しないですよ。そういう学校教育関係の改革が遅いという気がするんですが、これが遅い理由と、それからこれはどうやれば変えていけるのか。僕みたいにただ文句言っているだけじゃ何も変わらないですよ。

平 良：明白ですよ。要するに、現場の感覚ないですから行政は。地域の現場が分からないからです。

島 袋：教育委員会の中には、学校の先生も常に何名か入っていますよね？

平 良：トップの意識が問題ですね。地方分権と言っても全然地方分権じゃないですよ。国の閣僚見ても分かります。

思うんですが、現場を知っている人間をもっと入れたほうがいいと思います。下からの声だと思っていますよ。地域運動だと思います。地域や学校の問題は対岸の火事じゃないんですよ。地域のこととして現場で子どもたちと接して奮闘している人たちが声を上げないと、上は分かりませんよ。

県内で中学生の飲酒事件が連続して起こりました。その時の行政のトップが言ったのが、「各学校で地域懇談会を開催させます」と。僕は哑然としましたね。この方は分かってないなと思いました。あの事件は、学校が休みの時、または深夜の時間帯に地域で起こった事件です。ですからその事件の対策の主体は自治会と警察の問題ですよ。オブザーバーとして学校関係者が入るなら別です。これは一例ですけど、大事なことを分かってないですよ。

一番分かっているのが現場のPTAで苦勞されている方々、先生方です。それからやっぱり大学、高校、中学、小学校とそれぞれの現場を体験しなければ分からないと思います。僕は幸い小学校と中学校を経験しました。ずっと中学校でしたが、小学校に赴任して小学校の大変さを知りました。そういった現場を知った人たちが声を上げていかないと、動かさないといけません。歴史を見てもそうですよ。そのような草の根運動を地道にやっていく。現場を知らない行政には多くを期待しないほうがいいと思います。

島 袋：現場の意識の変わらない人がトップにいるわけですよ。この人たちが退くまで我慢ですかね。(笑) 本当は今すぐにでも変えたいんですけどね。

平 良：教育は待ったなしです。来年じゃないんです。今なんです。先生方にも言います。お互い大人は子どもに対して最善のものを与えないといけないんです。使い古しじゃ駄目なんです。賞味期限がきれたら駄目なんですよ。そういった意識を持ちながら、子どもたちと真摯に向き合っていないと子どもたちは育っていかないと。だからこういう勉強会は僕は嬉しいですし、頑張っていたきたいなと思います。

島 袋：上に向かって声を出しつつ、現場で日々子どもたちと向き合って、地域と関わっていくしかない。

新垣光：なぜ今の先生方はそんなに忙しいのですか？昔の先生方は、生徒も42名くらいいたと思います。

平 良：マンパワーが足りないですね。

新垣光：減らされているんですか？

平 良：先ほども言いましたが、私が現役の時代は、音楽の先生が3名いました。今は1人しかいないです。少子化を目論んでいますから、どんどん減らされています。そして、本務が少なくなった分を補充でまかなっている状況です。

新垣光：沖縄の場合、全国一先生方が休んでいますよね。あのモンスターペアレントのいる東京、首都圏よりも2倍くらい学校の先生が休んでいるんですよ。休んでいる先生方が戻ってくれば余るほどいると思いますが、なぜですか？甘えなのですか？

平 良：大都会の場合は休んでいるんじゃないくて、辞めている教師も多い。教員ほど割りに合わない仕事はないといって他の企業に職を変えています。沖縄だけです。受け皿が公務員しかないんです。だから教員選考試験も50倍、60倍の倍率です。沖縄に大企業、中企業、小企業があるかといったらないですよ。多くが零細企業。沖縄で教員を目指す青年たちが東京や埼玉等の大都会で試験を受けたらたぶん合格ですよ。でも、沖縄で教員をしたいからという理由で、そうなっているんです。

休んでいる先生が帰ってこればと思いますが、厳しいですね。病んでいる方々は被害者なんです。

新垣光：補充の方々が本職の方の授業を持って、それで授業ができるのですか？

平 良：だからマンパワーを増やせばいいんですよ。先進国みたいに。例えば、一例を挙げますと、特別支援教育に関してもイギリスの教育界の様子をたまたまTVで見たんですが、今ノーマライゼーションが進展していると言われている日本ですが、イギリスの場合は公立学校に特別支援教育の専属コーディネーターが2人いるんです。

日本では、特別支援学級の子どもの見ながら、普通学級にいる発達障害等、支援を要する子どもも面倒見ないといけない。保護者との連携もしないといけない。その時間も放課後しかできない。

ところが、イギリスの場合は、専任です。それにボランティアが一人の子に1人か2人くらいいます。日本と全然違うなと思ったのが、「どうしてこのような予算をかけているんですか？」という質問に、教育委員会の担当者が「子どもたちは人材です」と答えたんです。これですよ。本当に教育に関してどれだけの価値を見出しているかと。特別支援の子どもたち、発達障害の子どもたちを人材として見ているんですね。確かイギリスの閣僚にはLDの人もい

ましたよね。そういった意味でも、彼らも人材なんです。すごい能力を持っているんです。劣っていると思われがちな子どもたちも、すごい能力を持った人材なんですよね。

日本の場合、どちらかという学校におんぶに抱っこです。家庭や地域で見なければならぬことまで学校がカバーしなきゃいけないという社会風潮があります。私も毎日のように、深夜まで生徒指導をし保護者も呼んで説教して帰すということがあるんです。その様な事に対応するための人材も不足している。これが現実なんですよ。

渡久地：それで、学力も上げてとなると、とんでもないですね。

平 良：非常に厳しい状態があります。日本の社会全体が教育に関しては後進国ですよ。

島 袋：沖縄の場合は特に、予算が余ると、合法的な範囲で削って公共事業に充ててきました。大学もそうですけど、非常勤講師の人件費を削って、何をやったかというハコモノ作ったんですよ。

新垣百：教育学部の学生で、学校支援本部事業について研究しています。私自身も南風原町の学校支援ボランティアとして関わっています。

事業はお金を出してやっていると思うんですが、もし事業がなくなっても継続してやっていくための組織作り、ネットワーク作りが大切だと思うんです。その時に、重要な役割を担うのが、教育委員会の力じゃないのかなって思っています。

与那嶺さんにお聞きしたいんですが、コーディネーターを長いスパン継続していくためには、コーディネーターの立場として何が一番必要だと思いますか。

与那嶺：そうですね。学校の先生たちとの交流もなければ、学校に入って、コーディネーターは長く続いているかと思うんですよ。私は自分の子どもたちもお世話になったし、何かお手伝いができるならばやっていきたいなと思っています。でも学校側からの申し出がないと難しいですよ。自分で探していくわけにはいきませんので。求められるのもまたいいのかなと。求められないと分からないこともありますし。上手く活かしていけるのもみなさんじゃないかなと思います。交流がないとコミュニケーションがとれません。支援ボランティアがいても使ってもらえないとね。連携プレーが必要かな。

島 袋：交流、コミュニケーションと言うと、男性の場合だと、まず飲みに行こうとなりますが、女性の場合だったらどんな感じですか？

与那嶺：男の人みたいに飲みに行こうか！というのは女性だと難しいですよ。みんなそれぞれ忙しいですから。ですから、声かけでこういうコミュニケーションを持ってやっています。この間、私がボランティアの方に、「みなさんのお陰で子どもたちも触発されていますよ」と言うと、「いやいや、僕たちは何もしてないよ」とおっしゃったけど、違うんですよ。そういう姿を見て先生が動いて、そして子どもたちを動かしていくんです。

島 袋：こまめに連絡してお礼して、こまめにやっていくっていう感じですか？

与那嶺：はい。ですから、ボランティアですけど、ときどきは自腹を切ることもあります。自分もされてきた想いを分かりますので、喜んで頑張れるのかなと思います。声かけだけでも必要です。機会あるごとに声かけしていますね。

平 良：若い先生がいっぱいいますが、これからの社会というのは多分、退職する頃には退職金はないかもしれない。これからお互いはどうやってモチベーションを保ちながら仕事をやっていけるといいますか？お金じゃないですよ。価値観なんです。自分の哲学ですよ。自分の生

き方が問われてきますよね。コーディネーターもそうなんです。物事なんでもそうだと思うんですけど、誰かがやるだろうは、あなたの責任です。誰かがやるのではなく、自分からやっていく。その思いが結果につながるんじゃないかと思っています。

島 袋：平良校長、与那嶺さん、今日は本当にありがとうございました。